

春国岱で「ウラギク」の植生保護活動
が行われました 根室ワイズユースの会

7月7日、根室ワイズユースの会は春国岱でウラギクの植生保護柵を設置する保護活動を実施しました。

この日は根室ワイズユースの会の主催で広く市民参加を呼びかけ、外来種オニハマダイコンの駆除とウラギクの植生保護活動と一緒に行う予定でした。しかし周辺でヒグマ目撃情報があったため、市民が参加するオニハマダイコン駆除は延期して、今回は少人数によるウラギク保護柵の設置のみ行われました。

市職員を含め会員ら十数名が参加。環境省と札幌で環境保全活動を行うNPOのEnVision(エンビジョン)の職員による解説・指導のもと、百均で売っている材料で組み立てられた小型で簡易な保護柵を、これから秋に花を咲かせようとするウラギクの周辺5か所に設置しました。

私はウラギクとは何か知りませんでした。当日の説明によると、20年ほど前には秋頃、春国岱の木の脇などに紫色の花畑のような景色が見られたそうです。



9月の春国岱の草原では、淡い紫色のウラギクの花が咲き始めます。ウラギクは、北海道東部や関東以西、四国、九州の塩分の多い湿地(塩性湿地)に生育するノギク的一种です。

ウラギクは、生育環境が限られていることから、海岸の埋め立てなどにより全国的に減少しており、環境省のレッドリストでは、準絶滅危惧に指定されています。(日本野鳥の会札幌支部のブログから抜粋)

ウラギクの生活史 (当日の説明資料から転記)

1年目-茎や葉、根などの栄養期間を形成。休眠して越冬。茎が短く、葉はロゼット状(放射状)になる。

2年目-茎が伸長し、薹(とう)が立つ。秋に開花し、種子を生産して枯れる。エゾシカは、2年目の栄養のある【つぼみ】を食べる。

環境省等は昨年春国岱にウラギク保護柵の設置を開始。昨年は13基、今年は既に5基を設置しており、この日設置した分をあわせて23か所に設置されたことになりました。当日の参加者からは、このような保全活動を行っていることを市民や訪れた観光客等にお知らせするためにも、説明板等を春国岱の木道付近に掲示することも必要ではないか、といった意見が出されていました。

しかし今やウラギクはほとんど咲いておらず、紫の花がぼつぼつと見える程度にまで減っている、とのこと。エゾシカが花が咲く直前のつぼみを好んで食べることが大きな要因で、つぼみをつけるこれからの時期にエゾシカに狙われやすくなります。この日も草刈りをしたかのようにシバナやウラギクを食べた跡が広く見られました。また近年減少しているアッケシソウもエゾシカの通り道で踏まれ、固くなった土ではアッケシソウが育ちにくくなっているそうです。

萩・明倫学舎では多くの市民ボランティアが案内係などで活動し、学芸員みたいに展示のくわしい説明を行う。(写真の中央の方がボランティアさん)



※「ライフキャリア教育」は単に職業や仕事のことを教えるだけでなく、社会で自分たちが「どう生きるのか」を考えるための教育と、私は認識していますが、ライフキャリア教育に詳しい方はぜひ教えて下さい。

他の地域と同様に人口減少に悩む益田市では、市の総合計画に「ひとが育ち輝くまち」を掲げ、「ひとづくり」によって今後の市の活路を開くという理念のもと取り組みをすすめてきました。その中でも社会教育が重要な役割として、幼児期から小・中高、そして青年期までの「ライフキャリア教育※」を展開しています。

その特徴的な活動の一つが「益田版カタリ場」という取り組みです(今年から名称を「対話+プラス」に変更したそうです)。

7月2日〜3日、日本共産党根室市議団の鈴木一彦と橋本竜一は、会派細の久保田陽議員と須崎和貴議員と一緒に島根県の益田市、山口県の萩市で行政視察を行いました。

益田市では「益田版カタリ場」の取り組み等ライフキャリア教育について、萩市では明倫学舎を拠点とした観光振興、郷土の歴史を活かした教育や小中一貫教育の取り組みを学びました。



地域における「ひとづくり」をどうすすめるか
行政視察の報告 「益田市」・「萩市」の事例から



益田駅の中の「柿本人麿」の展示コーナー。柿本人麿の出生地である益田市は、益田市の神社にもその縁の神社もある。なお今回の視察には特に関係ありません。

2015年から実施されているこの取り組みは「小学生と高校生」・「中学生と地域の大人」・「高校生と益田の大人」が対一で本音で話をする時間です。これまでの自分の人生を紹介し、今の自分やこれからの自分、これから頑張りたいことを語り合います。参加した子ども達は、益田市にはどんな大人がいて、どんな思いや価値観をもって暮らしているのかを知り、自分たちの将来を考えていくきっかけとしているそうです。

こうした取り組みの成果なのか、益田市では「将来、益田に住みたい」と答えた新成人が80.9%、地元高校生の市内就職率は38%と高い数字になっています。また2022年度では、県外からのUターン者は217名(うち東京圏からは46名)にも上るそうです。

一方、萩市の学校運営協議会ではプロジェクトごとに学校・地域・保護者が熱心に意見を出し合う「熟議」を繰り返して実施。また小中一貫教育の課程で小学生と中学生が熟議をしたり、中学生と高校生が熟議する取り組み等も行っています。

今回視察に訪れた二つの市は地域の中でどのようなひとづくり、ひとの育ちを支援していくのかという基本理念を行政として「ひとづくり協働構想」という長期的なビジョンにして掲げています。こうした観点が大きい参考になりました。